

平成 22 年 5 月 27 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2009

課題番号：19730478

研究課題名 (和文) 札幌農学校生との学業史に関する研究

研究課題名 (英文) The study of the schoolwork history in Sapporo Agricultural College

研究代表者

井上 高聡 (INOUE TAKAAKI)

北海道大学・大学文書館・助教

研究者番号：90312420

研究成果の概要 (和文)：第 14 期生平塚直治の「園芸学」受講ノート (南鷹次郎教授講義) を翻刻することにより、農学校生の農学分野における学業内容を具体的に明らかにした。また、農学校卒業生である南が、外国人教師から学んだ最先端の農学を、農場における実験データを基に、北海道及び日本により適合的な内容に構成し直して教授していることが分かった。研究の過程で、農学校生の学業記録 (カリキュラム、履修表、受講ノート、卒業論文等) の調査を行ない、農学校の学業及び学術の変遷の概略を明らかにした。

研究成果の概要 (英文)：In this present research, I deciphered Hiratsuka Naoharu's note attended "Gardening" was lectured by professor Minami Takajiro, and clarified the content of studies in the field of agriculture in Sapporo Agricultural College. Prof. Minami studied the stage-of-the-art agriculture to foreigner teachers and graduated from Sapporo Agricultural College graduate. Then he became the teacher of this college, and rebuilt agriculture corresponded to Hokkaido or Japan based on the data of the experiment in the farm. In addition, in the process of the research, I researched records of studies of this college, and deciphered the outline of studies and researches of the college.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,300,000	0	1,300,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	420,000	3,120,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育史、札幌農学校、学業史

1. 研究開始当初の背景

札幌農学校に関する歴史的研究としては、

後身校である北海道大学が編集した正史としての大学史が、組織変遷を中心に全体史を

記述している。さらに、札幌農学校創立時の教頭である W.S. クラークや初期の著名な生徒である内村鑑三・新渡戸稲造などを取り上げ、外国人教師の感化によるキリスト教やヨーロッパ・アメリカの思想・文学の受容との関わりで、思想史的・精神的視点から論じた研究が多い。教員の研究活動等に関しては、植民政策学史研究の一環として、佐藤昌介・新渡戸稲造・高岡熊雄ら農業経済学分野の研究を対象として取り上げたものが増えている。生徒・学生の活動を考察した研究は、有島武郎が主宰した美術団体「黒百合会」や、日本における最初期の運動会にあたる「遊戯会」といった文化・スポーツに関する課外活動、校友会に当たる「文武会」における学生運動、新渡戸稲造が創立した貧困家庭の子女に教育の場を提供するための「遠友夜学校」などの学外における社会活動に限られていた。

先行研究が以上のような状況であるため、札幌農学校生が、専門学科である農学分野において、何をどのように学んでいたかについては、ほとんど明らかになっていなかった。このことは、札幌農学校が近代日本において、農学を専門とする高等教育機関として極めて特異な存在であるにも関わらず、その歴史的な位置づけについて、十分な考察がなし得ていない研究状況を示していた。

2. 研究の目的

北海道大学は札幌農学校生の受講ノート、報文・レポート、卒業論文等の学業記録を未整理ながら多数所蔵しているが、その存在はほとんど知られていなかった。また、札幌農学校公文書等には、当時のカリキュラムや履修状況を示す文書資料が含まれている。これらの学業記録を解説・分析することにより、札幌農学校生が何をどのように学んだかという「学業史」を考察することが可能であると考えた。

札幌農学校に関しては、従来、W.S. クラークら初期の外国人教師がもたらしたキリスト教信仰やヨーロッパ・アメリカの思想・文化といった視点から考察され、ヨーロッパ・アメリカの文化をかなり直截に取り入れた希有な官立学校として思想的に位置づけられていた。しかし、札幌農学校生の学業の様相を、就中、農学専門分野を中心に考察することにより、これまでとは異なった、より実状に近い札幌農学校像を明らかにでき、近代日本史上における札幌農学校の独自の役割もより明確にし得ると考えた。また、これまでの大学史・高等教育史研究においてもほとんど明らかにされてこなかった、生徒・学生の「学業史」に有意な事例を提示できるものと考えた。

3. 研究の方法

札幌農学校在学生の受講ノートを主要な資料として、講義レポートや修学旅行、研究報文、卒業論文などの学業記録を手掛かりに、札幌農学校生の「学業史」を考察した。

準備段階として、第1に、札幌農学校各年の講義カリキュラム、履修状況と講義担当者を一覧として整理することにより、カリキュラムの変遷と特徴を明らかにした。第2に、札幌農学校卒業生398名の名簿の作成と、受講ノート276冊・卒業論文等の整理とリスト作成を行なった。

本研究で中心的資料として取り上げたのは、札幌農学校第14期生平塚直治が記録した南鷹次郎教授の「園芸学」講義の受講ノートである。平塚直治は1892-96年に札幌農学校本科に在学し、宮部金吾教授に師事して植物病理学を専攻し、「亜麻立枯病研究」を進めた。卒業後、中学校教員を経て、北海道製麻株式会社技師となり、後に帝国製麻株式会社取締役を務め、北海道の実業界で重きをなした。

平塚の受講ノートを取り上げた理由は、第1に、平塚の在学時期が、札幌農学校の教員が外国人教師から第1、2期生卒業生を中心とする教授陣に切り替わり、札幌農学校の研究・教育内容が確立する時期に当たったことである。第2に、平塚が卒業後の進路において、技術者として札幌農学校における学業の専門性を生かした人物であり、札幌農学校が創立以来、常に課題としていた農業の専門技術者養成を体現したことである。

平塚の受講ノートは各教科にわたり28冊が存在する。その内の4冊を占める「園芸学」を取り上げた理由は、札幌農学校において時間数や学科構成などのカリキュラム編成上、最も重視された教科であったためである。創立後、外国人教師W.P. ブルックスが「農学」として講義を開始し、A.A. ブリガムを経て、第2期生であった南鷹次郎が「園芸学」としてこれを引き継いだ。南が学生時代に記録したW.P. ブルックス講義「農学」の受講ノートも存在するため、両者を比較することにより、外国人教師から学んだ当時のヨーロッパ・アメリカの最先端の「農学」を、南がどのように継承し後進に伝えていったかを考察することも可能である。

本研究では、資料的価値が高い南鷹次郎教授講義「園芸学」（平塚直治受講ノート）の解説・翻刻を行ない、周辺資料を参考に考察を進めた。

4. 研究成果

(1) 札幌農学校の教員構成の変遷

札幌農学校の教員は、植物学 (W.S. クラーク)、工学 (H. ホイラー)、化学 (D.P. ペンハロー)、農学 (W.P. ブルックス) の体制

でスタートした。外国人教師の交替は頻繁にあったが、常時2,3名が在任し、主要教科を担当していた。しかし、最後の外国人教師であった農学担当のA. A. ブリガムが1893年11月に離任し、札幌農学校第1,2期卒業生を中心とした教授陣へと切り替わった。

分野の取捨と専門分化が進み、農業経済学分野の佐藤昌介（第1期生）、植物学分野の宮部金吾（第2期生）、農学分野の南鷹次郎（第2期生）、農芸化学分野の吉井豊造（東京帝国大学出身）、畜産学分野の橋本左五郎（第8期生）が中心となった。各分野の動向を見ると、南が担当した農学分野では、早い時期に教え子の橋本左五郎（第8期生）が畜産学を分掌し、その後も第11期生須田金之助が養蚕学、第13期生松村松年が昆虫学、第15期生時任一彦が農芸物理学、第19期生星野勇三が園芸学、同じく東海林力蔵が工芸作物学を分掌していった。宮部金吾が担当した植物学分野でも、第19期生半澤洵が応用菌学を専攻して専門化していった。佐藤昌介の農業経済学分野では、1年後輩の第2期生新渡戸稲造が農業史・殖民論を専門化し、新渡戸離任後はその教え子の第13期生高岡熊雄が農政学を分掌していった。札幌農学校で専門化できなかった林学分野と動物学分野には、東京帝国大学出身の教員を採用した。同じく農芸化学分野の吉井豊造も東京帝国大学出身であったが、札幌農学校で第11期生大島金太郎を指導し、後に同分野を分掌させた。

こうして、1907年に札幌農学校が東北帝国大学農科大学として帝国大学に昇格した後に組織がなされる「講座」の素地を形成していった。

(2) 札幌農学校生の学業の特色

札幌農学校では設立時に教頭 W. S. クラークの強い要望により農校園を設置した。その後、「農学」担当の W. P. ブルックスが農校園経営責任者となり、生徒に農業技術の実地演習を行なった。農校園における実地演習はカリキュラム上、常に重要視されていた。

1888年卒業の第7期生から卒業論文作成が定められた。1895年卒業の第13期生から「実科演習」（専攻学科）の振り分けが行なわれた。生徒は農業経済学・農芸化学・植物病理学・農学・畜産学を選択して専攻することとなった。

このほか、1893年ころから教員引率による修学旅行が行なわれ始め、希望する生徒が北海道内や本州方面等へ出掛けた。それぞれの専攻や関心により、植物・地質標本収集、農家・農場・牧場経営の視察、農産物収穫調査、博覧会見学などを行なって報文・レポートを作成して、学校に提出した。

札幌農学校生は、講義以外に、実地研修と高度な専門性を特徴とするこれらの学業形

態により技術と知識を身につけていったのである。

(3) 南鷹次郎「園芸学」講義

第14期生平塚直治が在学した時期の札幌農学校では、最後の外国人教師 A. A. ブリガムが離任した（平塚本科2年級在学時）。教授陣は、外国人教師から教授を受けた第1,2期生卒業生らが中心となり、外国人教師から授けられた当時最先端の学問を継承・咀嚼して後進に伝えていく立場に立つことになった。札幌農学校の学術・学業の転換期であったと言える。

外国人教師は「農学」講義において、主にヨーロッパ・アメリカにおける農業技術、作物栽培法、家畜飼育法等を非常に詳細に教授した。これは、北海道「開拓」事業を管轄した開拓使や北海道庁が本州以南とは気候の異なる北海道では、従来の稲作を中心とする日本の農業では十分な生産を上げ得ないと考え、西洋の農産物生産を導入する方針を立てたためであった。

南が外国人教師在任中に札幌農学校教員に着任すると、「日本農学」講義を開講し、稲作を中心とする日本農産物栽培法を講義した。外国人教師の離任後は、農学分野全般の講義を担当することになった。

平塚の受講ノートを読み進めると、南が外国人教師から学んだ「農学」を継承しながら、関係洋和書を参考にしつつ、自身が農場で行なった実験データを加味して、北海道あるいは日本により適合する講義内容に組み替えている様子を伺うことができる。受講ノートに記録された、各作物栽培法の解説文の文頭に頻発する「本邦では」「本道では」といった文言、日本農業古来の技術の例示、日本品種の紹介などに、南が行なった「農学」「園芸学」の学術的形成を見ることができる。

札幌農学校卒業生は、北海道をはじめ本州以南、あるいは樺太・台湾・朝鮮半島・中国大陸等において農場や農事試験場の技術者となる者や、官公庁で農政を担当する者が多かった。彼らは、南の講義が就職先で実践的に有意であったことを回想している。

南の「園芸学」は、ヨーロッパ・アメリカの最先端の学問を取り入れると共に、日本及びその植民地で農業技術・農政を担う場合に拠り所となる実践的な知識と技術を教授していたと言える。

(4) 今後の課題

本研究では「農学」「園芸学」を中心に取上げたが、同様に「植物病理学」、「農芸化学」、「農業経済学」等についても対象とする必要がある。さらに、札幌農学校生が、学業で得た知識・技術を自身の職業分野でどのように活用・応用したかについて、研究方法を含め検討しなければならない。以上2点を踏まえ、札幌農学校の歴史的な位置づけにつ

いて引き続き幅広く考察することが今後の課題である。

(5) 本研究の過程で、調査データとして以下のリスト・一覧類を作成し、雑誌等に掲載した。

①札幌農学校受講ノート目録

北海道大学大学文書館が所蔵する札幌農学校生の受講ノート276冊(複製を含む)のリストである。講義名、講義者名(担当教員)、作成者名(受講生徒)、講義年代を記載項目とした。また、筆記者の略歴を付した。

②札幌農学校本科講義履修表

①に掲載した受講ノートの作成者が在籍した第1-4, 8, 13, 14, 16, 17, 19, 23期生の本科全学年(4年間)の履修科目・担当教官を記載した履修表を作成した。

③札幌農学校本科(農学科・工学科)卒業生一覧

札幌農学校本科卒業生398名の名簿である。氏名、卒業期、卒業年、実科演習(専攻学科)、卒業論文題目を記載項目とした。札幌農学校生の卒業論文は、北海道大学大学文書館と農学部図書室が246名分を所蔵することを確認している。

④札幌学校カリキュラム一覧

札幌農学校全期(1876-1907年)にわたる予科(予備科、予修科)、本科(農学科・工学科)の学課・科目名、開講学年・学期、時間数を記載項目とした。

(6) その他、北海道大学附属図書館・大学文書館が共催した展示企画「北大生の学生群像」において、本研究の成果の一部を学生・教職員及び学外からの来学者に対して紹介を行なった。展示場所は北海道大学附属図書館入口ロビーである。

①「札幌農学校生の学生生活(1)——札幌農学校で世界と出会うとき——」(期間:2009年10月16日~2010年2月15日)

②「札幌農学校生の学生生活(2)——札幌農学校で世界が出会うとき——」(期間:2010年2月16日~5月15日)

なお、この展示企画の概要を「[展示]「北大生の学生群像」第Ⅰ期・第Ⅱ期」として『北海道大学大学文書館』第5号(2010年)133-166ページに掲載した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

①山本美穂子、井上高聡、[目録]受講ノート——札幌農学校生の学業記録——、北海道大学大学文書館年報、査読無、第4号、2009、100-169

②井上高聡、〈翻刻〉南鷹次郎講義「園芸学」(平塚直治受講ノート)上、北海道大学大

学文書館資料叢書、査読無、1巻、2009、1-125

③井上高聡、〈翻刻〉南鷹次郎講義「園芸学」(平塚直治受講ノート)下、北海道大学大学文書館資料叢書、査読無、2巻、2009、1-135

④井上高聡、札幌農学校生の学業をめぐって、北海道大学大学文書館資料叢書、査読無、2巻、2010、136-153

[学会発表](計0件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 高聡 (INOUE TAKAAKI)
北海道大学・大学文書館・助教
研究者番号: 90312420

(2) 研究分担者

()
研究者番号:

(3) 連携研究者

()
研究者番号: